

天の川こども園構造見学会

真庭産木材を使った新園舎を見学



建築中の遊戯室で担当者から説明を受ける参加者

市政トピックス TOPICS

10月28日、天の川こども園の建築現場で、公共建築物などでの木材利用促進を図ることを目的として、行政関係、設計関係者などを対象に、構造見学会が行われました。約60人が見学に訪れ、建築事務所の担当者から、遊戯室などの大規模な空間を構成する方法、太陽熱や太陽光といった再生可能エネルギーを活用した設備の説明などを受けました。同こども園は、市内で製材から加工・組立された真庭産の木材を使用し建築されています。

11月4日、真庭、津山、新見、美作の4市長が気象警報・注意報の発表区域が市の北部と南部で差が大きいため、細分化を求めるとの要望書を岡山地方気象台へ提出しました。現在気象台から発表される注意報・警報などの対象は原則、市町村単位と定められています。市域が南北に広い市の実情に沿っていないとして、4市長は各市が定める南北の境界などを考慮して細分化した情報提供が必要と訴えました。

県北4市で気象台へ要望 実情に沿った情報提供を



岡山地方気象台職員に要望を伝える4市長



緊張の面持ちで校歌を歌う生徒

美甘中学校校歌を収録
母校の校歌を後世に

10月24日、美甘中学校で「巻き起こせ美甘魂！最高の舞台を」と題し、最後の文化祭が開かれました。生徒が合唱や合奏、演劇を披露。最後は、今年度で閉校となる母校の校歌を後世に残そうと、生徒をはじめ、地域の人も参加し全員で校歌を歌い、その音源を収録しました。また、同校では、平成28年3月26日に閉校式を行うため、卒業生をはじめ、開校以来勤務した教職員など、多くの参加を呼びかけています。



市政に関する動きの一部を紹介します

11/11 真庭の創生を市民と話し合う

真庭市議会地域報告会が美甘振興局で開かれました。真庭市が今年度策定した「まち・ひと・しごと創生総合戦略」などについて、議員と市民が意見を交わしました。報告会は16、17日にも市内各地で開かれました。



11/16 真庭の魅力を発信するために

真庭市観光サポーターズ倶楽部情報交換会が大坂阪急ホテルを会場に開かれ、近畿圏の会員ら約120人が参加しました。真庭産食材を使ったメニューが振る舞われるなど、参加者は楽しいひとときを過ごしました。



市長室から こんにちは!

無謀な太平洋戦争からの教訓

太平洋戦争前年の昭和15年の日米の経済力を比較してみました。粗鋼生産は日本685万トン、アメリカ6076万トン、自動車生産は日本3万6千台、アメリカ447万2千台。これだけ見ても、勝敗は自から分かっていました。それなのに「無謀な」戦争をなぜしたのでしょうか。国民の大多数はなぜそれを支持し、真珠湾攻撃に歓喜したのでしょうか。第2次世界大戦では世界で5千万人～8千万人、中国1千万人、日本310万人の戦死者を出しました。坂道を転がりだしたら歯止めが効かなくなります。これが政治の恐ろしいところです。「満州事変に始まるこの戦争の歴史を十分に学び」という天皇陛下の新年のお言葉どおり、歴史を学び教訓を得なければ、この死者は浮かばれません。太平洋戦争開始から74年目の12月8日を前に、改めて歴史から学ぶ決意をします。それが真の供養でありましょう。



市長と握手を交わす岡山商科大学の井尻昭夫学長

11月6日、湯原温泉砂湯入口で、真庭市、湯原観光協会、湯原町旅館協同組合と岡山商科大学との連携協力に関する合同協定締結式が行われました。同大学が持つ社会学分野についての知識資源と研究成果を、市内のサービス系企業などが抱える課題の解決や地域活性化に生かしていくことが目的。また、多くの学生が真庭に来ることによる地域の活性化や若い視線でのアイデア提供も期待しています。

岡山商科大学との協定
大学とまちづくりで協力



発電所裏の斜面に向かい放水する消防団員

11月7日、真庭バイオマス発電所で公開消防訓練が実施されました。訓練には、発電所社員と真庭消防署、地元消防団員ら約80人が参加。発電所タワーピン建屋2階電気室から出し、逃げ遅れた社員がいると想定し訓練を行いました。発電所社員が通報訓練、初期消火訓練を行った後、消防署員が、建物内で行方不明者を捜索。全員の安否を確認後、消防団員がポンプ車からホースを伸ばして放水訓練をしました。

公開消防訓練
消防署と消防団が連携

戦後70年、歴史を振り返り 平和の尊さを伝えよう

史料展「真庭地域のアジア・太平洋戦争」が11月8日～29日まで、北房振興局で開催されました。戦後70年の節目に、真庭地域と戦争との関わりをたどり、平和への思いを深めるために開催。展示された史料は、市民から寄せられたものから市所蔵のものまで約100点。遺言書や戦地で使用した服や靴、当時の新聞・写真など、戦前・戦中・戦後の世情を物語る史料が並び、訪れた人たちは真剣な表情で展示に見入っていました。

戦地に赴く父から家族へ宛てられた遺言書



戦後間もない時期に真庭地域の尾崎住一郎氏が詠んだもので、昭和25年の宮中歌会始（天皇が年始に催す歌会）に選ばれた歌。

御題 若草
目もはるに
野辺の若草
もゆるなり
うまし
此国
いくさせぬくに

尾崎蘭青



職員による展示解説



軍服や日章旗に見入る来場者

真庭市人権講演会 「Peace from 真庭」

史料展の開催に合わせて11月8日、北房文化センターで真庭市人権講演会が開催され、約350人が聴講に訪れました。長崎市の田上富久市長が、長崎市が行っている平和の取り組みなどを紹介。「70年前の長崎に何が起こったかを知り、核兵器の悲惨さや苦しみを後世に伝え、平和な世の中になるよう一歩ずつ歩いていきましょう。真庭から平和を」と呼びかけ、核兵器根絶の必要性を訴えました。

原爆は悲惨、核兵器は無意味なもの

～昭和20年8月9日の被爆から～

世界的な反核の流れの中でさえも、核兵器は世界に1万5700発も存在しています。そして、長崎が観光都市として復興した今もなお、いつ発症するとも分からない後遺障害の不安と恐怖に苦しめられ、差別や精神的に苦しんでいる被爆者が大勢います。

私たちは微力だけど、無力ではない

～世代や国を超えたつながりを～

唯一の被爆国である日本がリーダーシップを取り、核の非人道性を訴え続けなければいけません。そのためにはまず戦争や原爆の愚かさを知ること、次に声を出して行動に移すことが大事です。戦争体験は共有できないけれど、非核・平和への思いは誰でも共有できるはず。